



説教要旨 「因果応報を乗り越えて」

ルカによる福音書 13章 1～9節

何人かの人がイエス様のもとに来て、「ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたこと」と告げました。神を礼拝しようとしていたガリラヤ人たちが、事もあろうにその礼拝の場で、ローマ総督であるピラトによって無惨に殺されてしまった、という出来事がイエス様に伝えられたのです。それに対してイエス様も一つの出来事を持ち出しています。それは、シロアムの塔が倒れて18人の人々が死んだ、という事故のことでした。この二つの悲惨な事件や事故を取り上げて、このような悲惨な死に方をした人々は、特別に罪深い者たちだったからそのような不幸に見舞われたわけではないと、因果応報の考え方を否定されたのです。

私たちは悲惨な出来事を見聞きする時、あるいは自分自身が不幸を味わう時に、「何故」と問い、不幸な目に合う理由や原因を探ろうとするのです。そして納得できる理由が見つからないと、「神はなぜこんなひどいことをなさるのか」という抗議の思いを抱くのです。しかしイエス様は、苦しみの理由や原因を示そうとはしません。なぜなら、納得できる理由を見出すことが、苦しみの解決や救いになるわけではないことをご存じだからです。

そして、イエス様は一つのたとえ話をされました。ぶどう園に植えられた一本のいちじくの木が、3年経っても実を实らせないというのです。主人は怒り、いちじくの木を切り倒せと命じますが、園丁はいちじくの木を延命を主人に願ひ出るので、主人の、つまり神の怒りと裁きを前にして、切り倒されそうになっているいちじくの木のために執り成しをする園丁、それは、罪人でありながら悔い改めの実をいっこうに結ばない私たちのために、主人である神様との間に立って執り成して下さるイエス・キリストの姿です。今にも切り倒されようとしている私たちのために、神様の独り子であるイエス・キリストが人間となって下さり、十字架にかかって死んで下さった。このイエス様の執り成しによって、神の裁きよって滅ぼされることなく、生かされ歩むことが許されているのです。



(2019・9・1 説教者：稲垣真実)